

“Is Jem Dead?”——ジェム追悼としての『アラバマ物語』  
—Is Jem Dead? –Reading *To Kill a Mockingbird* as a book of memory—

畔柳 和代  
(KUROYANAGI Kazuyo)

In *Go Set a Watchman* (2015), Jean Louise Finch goes home to Maycomb, Alabama for a two-week vacation. There she finds that her father's views on racial discrimination and segregation are in conflict with her own. He is not the man she thought he was. This affects her sense of self, but she has no peer to discuss this with. Her childhood friend Dill is abroad, her brother Jem is dead.

In this essay I discuss how the narrative of *To Kill a Mockingbird* (1960) implies Jem was dead when the narrator looks back on the events leading to the Tom Robinson trial and Jem's accident. Reading *To Kill a Mockingbird* as an act of memory makes clear why the novel begins and ends with the narrator observing, and making observations on, Jem.

### はじめに

Harper Leeが生涯に発表した長編小説二編は、アラバマ州の同じ町を舞台としている。第一作から半世紀以上を経て刊行された *Go Set a Watchman* (2015) では二十六歳の主人公 Jean Louise Finch が1950年半ばにこの町で過ごす夏の数日が三人称で描かれ、第1章で兄 Jem が亡くなっていることが判明する。ジーン・ルイズは弁護士である父親の人種差別的な言動をふるさとで見聞きして衝撃を受け、亡兄との思い出や、人種問題について父親から教わったことを振り返る。

第一作 *To Kill a Mockingbird* (1960) では語り手ジーン・ルイズが子ども時代を回想し、主に1933年夏から1935年秋までが語られる。同作

で最初に名前が挙がる人物は兄ジェムであり、彼が左肘を骨折するにいたった経緯が全編をつなぐ糸となっている。二部構成の同作において、第一部の最終章にジェムが中心となるエピソードが配され、ジェムは近所の老婦人が亡くなった晩に彼女から花を一輪贈られる。第二部の第一行目は“Jem was twelve.”である。作品の終わりには、ジェムが骨折をした夜、父親が彼を朝まで見守ったことが述べられている。*To Kill a Mockingbird*は、ジェムに始まり、ジェムに終わる作品だ。

本稿では、*Go Set a Watchman*で明かされたジェムの死を踏まえ、*To Kill a Mockingbird*はジェムの死に直接触れずにジェムを追悼していると仮定し、同作における死者ジェムについて検討する。*To Kill a Mockingbird*におけるジェムの存在感の強さは、その死ゆえと考えられる。ジェムが死者だからこそ、同作は兄に始まり、兄に終わる話なのではないだろうか。最終章でハロウィーンの夜に怪我をしたジェムが家に運び込まれたあと、八歳の妹は心配をして、“Is Jem dead?”と父、叔母、医師に問う。その晩はBoo Radleyが兄妹の命を救い、二人を刺そうとしていた男は死ぬ。この夜の危機をジェムが生きのびることを語り手は作品冒頭で述べている。しかし、この夜プーに助けられるまでの経緯を妹が*To Kill a Mockingbird*で語っているとき、設定上、ジェムはおそらく亡くなっている。

## 二作の成り立ち 死者から生者へ

*Go Set a Watchman*（以後GSAW）のHarper Perennial版の巻末には出版社による短文が付され、同作がリーによる最初の長編小説であり、1957年にリーのエージェントから複数の出版社に送られたと説明がある。このとき関心を示したLippincott社に対してエージェントはさらに、リーが子ども時代を描く長編第二作目を執筆中だと知らせ、原稿を送った。“She aims to break it off at the point where the brother enters high school, leaving the four-years-younger sister to a lonely childhood” (280) と説明している。兄が四歳下の妹を残して離れていくイメージは、当初からあった

ようである。

Casey Cepは*Furious Hours* (2019) の第17章“The Gift”に、リーが作家になるために二十三歳でニューヨークに移ってから第一作の原稿が完成するまでの過程と背景を詳述している。1956年11月にリーは初めてエージェントを訪れ、数編の短編小説を見せた。エージェントはリーの文才を認め、なじみの題材で長編を書くよう12月に勧めた。折よく同年のクリスマスにリーは友人夫妻から、執筆に一年間打ちこむための一年分の経済支援を贈られる。リーは仕事を辞め、1957年2月下旬にGSAWの原稿を書き上げた。次に短編数編をもとにして、子ども時代をめぐる長編小説*The Long Good-bye*の草稿を1957年6月半ばに書き終えた。Lippincott社の編集者から改稿を要請されたリーは、子ども時代に内容をしぼり、改稿版を同年10月に書き上げた。このあとも編集者と幾度も話し合い、二年にわたって根気強く改稿をつづけ、1959年11月に*To Kill a Mockingbird* (以後TKAM)の原稿が仕上がった。(pp.172-179)

ジーン・ルイズが兄を亡くした喪失感をメイコムで改めて味わい、父の人種差別的な言動と考え方に憤り、孤立感や絶望を覚える数日間をGSAWにおいてひとつの作品にまとめたあとにTKAMは書かれ、練り上げられた。二十六歳のジーン・ルイズが彼女なりに「父親殺し」をする夏の数日を描いたあとで、リーは数年をかけて、ジェムが九歳から十二歳、ジーン・ルイズが五歳から八歳だったころ(“When I was almost six and Jem was almost ten,” TKAM, 7)のメイコムを言葉で構築し、二人を取り巻くさまざまな人間関係を平易な言葉で編み上げた。TKAMにおいてジーン・ルイズは、Scoutと呼ばれていた子どもころの視点と理解力をもってジェムの喜怒哀楽を見つめ、大人の語り手としてつぶさに語っている。

*Atticus, Scout, and Boo —A Celebration of To Kill a Mockingbird* (2010) には、ドキュメンタリー作家Mary M. MurphyがTKAMについてインタビューした26名の言葉が収録されているが、書名が示すとおり、そのなかにジェムの影は薄い。映画でスカウト役を演じたMary Badham、リー

の長姉で弁護士の Alice Lee、コラムニスト Anna Quindlen、公民権運動の初期リーダー Andrew Young、Oprah Winfrey などが *TKAM* にまつわる思い出や同作の意義を語るコメントのなかにジェムの名前はない。同書でジェムの名前を挙げているのは、作家 Wally Lamb、作家 James Patterson、リーと同じくアラバマ州モンロービル生まれの作家 Mark Childress など少数である。チルドレスは *TKAM* の映画版と本をくらべ、映画はアティカスの映画になっているが、書物のほうは「スカウトとジェムの本」と述べる。“And the book is really Scout’s book. It’s Scout and Jem’s book. It’s really about the children’s learning; the whole town teaches them a little bit at a time.” (Murphy, 80)

GSAW の刊行後に、ハーパー・リーを再解釈する論考が集められた *Mockingbird Grows Up* (2020) に白人の少年ジェムを重視する論文はなく、ジェムへの言及も少ない。同書に収録されているのは、GSAW のタイプ原稿が発見され、刊行されるまでの経緯、アティカスの人種差別主義、差別される側としての白人女性 Mayella、フィンチ家で働いていた Calpurnia 等をめぐる論考等である。しかし、編者の一人 Cheli Reutter は序章で二作品におけるジェムに軽く触れ、GSAW のジェムが死者であるのに対して、*TKAM* のジェムは生者の側で——“from our side of mortality”——発言していると述べている (Reutter and Cullick, 10)。

さて、*TKAM* の語り手の回想のなかで、ジェムがメイコムに降ったわずかな雪で工夫して雪だるまを作り、ブー・ラドリーを思って静かに涙を流し、再来年アメフトをさせてもらえる体を作ろうと精一杯食べ、Tom Robinson の有罪判決に泣き、憤り、黙る姿が語られるとき、ジェムは生者の側にいるのだろうか。

### ジェムがいないメイコム——*Go Set a Watchman* (2015)

GSAW でジェムの死に最初に言及があるのは、ジーン・ルイズが第一章でアラバマ州で列車から降り、迎えに来てくれたのが幼馴染でボーイフレンドの Henry Clinton だと認識したときだ。アティカスは弁護士事

務所を一人息子のジェムに継がせるつもりだったが、ジェムの死後、息子の幼馴染ヘンリーを仕事上の片腕とした。第17章でもジーン・ルイズは立ち去るヘンリーを見ながら、ジェムを思い出す。ジェムと同級生だったヘンリーは子どもの頃はフィンチ家の近所に下宿して学校に通い、夏休みは母親のもとに帰って働いていた。戦後に復員兵援護法による給付を受けて大学へ進み、弁護士となった。

第5章でヘンリーは子どものころを振り返り、夏休みにディルがジェムとスカウト（ジーン・ルイズ）を独り占めにしているのが妬ましかったと述べる。そのディルは長らく海外で暮らしており、ジーン・ルイズはジェムの死をディルに伝えそびれたという。“You know, Dill was the one person we forgot to tell when Jem died. Somebody sent him a newspaper clipping. He found out like that.” (71) *TKAM*で夏を共に過ごす三人組は、*GSAW*ではばらばらになっており、再び集まることはない。

*GSAW*でジーン・ルイズが「帰る」家は、ジェムが亡くなったあとにアティカスが別の地区に建てた家であり、その家でジーン・ルイズは現実に向き合おうとするアティカスの強さに、改めて感じ入る (29, 31)。長年フィンチ家で家事をしていた黒人女性カルパーニアは引退している。七十二歳になっているアティカスは弁護士業を続けているが、関節炎のため車の運転、食事など日常生活に支障をきたすようになり、半年前から妹 Alexandra が同居している。叔母から姪には、メイコムに戻って父と暮らすのが一人娘の義務だという圧もかかっていた。ジーン・ルイズが帰省して二日目に教会で父、叔母、叔父を見比べ、三人の眉毛や目のあたりにフィンチ家らしさを見出して感慨にふけると、次世代のフィンチは彼女一人であることが際立つ。婚約者がいたジェムは亡くなり、叔母が誇りにしているフィンチ家は、衰退に向かっている。

*GSAW* 第10章には、アティカス・フィンチ一家の家族史を示す一節があり、ジェムの死が母親と同じく心臓発作によるものであったこと、また、父親の弁護士事務所の前の舗道で亡くなったことが記されている。

His children were in a position to know as children seldom are: when Atticus was in the legislature he met, loved, and married a Montgomery girl some fifteen years his junior; he brought her home to Maycomb and they lived in a new-bought house on the town's main street. When Atticus was forty-two their son was born, and they named him Jeremy Atticus, for his father and his father's father. Four years later their daughter was born, and they named her Jean Louise for her mother and her mother's mother. Two years after that Atticus came home from work one evening and found his wife on the floor of the front porch dead, cut off from view by the wisteria vine that made the corner of the porch a cool private retreat. She had not been dead long; the chair from which she had fallen was still rocking. Jean Graham Finch had brought to the family the heart that killed her son twenty-two years later on the sidewalk in front of his father's office. (114-115, 下線筆者)

その家のはかつて町のメインストリートにあり、そこでアティカスと妻は新婚生活を送り、息子と娘が生まれ、妻がポーチで亡くなった。フィンチ家にとって大事な出来事の多くが起きた家である。そして、上の一節には含まれていないが、ジェムの葬儀が行われた日に、人々が集った家でもある(29)。ジーン・ルーズは、第8章で父親とヘンリーが人種差別的な会合に出席している姿を目の当たりにして大きな衝撃を受けた日とその翌日、かつての家があった敷地に足が向き、カニングム某が経営しているアイスクリーム店の屋外席に座り、吐き気を催したり、茫然としたり、十三歳のときにジェムとヘンリーの学校で開かれたパーティに出かけたときのことを回想したりする。そして、自分は、これからも、ひそかに過去に戻り、過去の父や兄やヘンリーの姿を求めるしかないのだろうかと思いを抱く。”What had she done that she must spend the rest of her years reaching out with yearning for them, making secret trips to long ago, making no journey to the present?” (225)

アティカスがジェムの死について娘と唯一言葉を交わす第17章の場面では、現実に向き合うアティカスと、過去への思いが強いジーン・ルイーズの違いは鮮明だ。この場面で二人は期せずして、ジェムが亡くなった舗道に立っている。アティカスは、娘の思いが死者ジェムに傾きすぎていると考えて、“Bury your dead”（忘れなさい）と言う。父娘の会話の前に、ジーン・ルイーズはヘンリーと話している。この日、二人の結婚話は破談となり、ヘンリーはジーン・ルイーズに対して、自分は「トラッシュ」と見なされている、だからメイコムに受け入れてもらう行動をとらねばならない、フィンチ家の人間のように自由には振舞えない、と訴えている。父娘の会話が始まるのは、ヘンリーが立ち去り、ジーン・ルイーズがヘンリーに重ねてジェムを思い、自分がジェムの亡くなった場所にいると気がついて体を震わせたときである。

Atticus had treated him like his own son, had given him the love that would have been Jem's—she was suddenly aware that they were standing on the spot where Jem died. Atticus saw her shudder.

“It’s still with you, isn’t it?” he said,

“Yes.”

“Isn’t it about time you got over that? Bury your dead, Jean Louise.”

“I don’t want to discuss it. I want to move somewhere else.” (236–237)

*TKAM*のメイコムに描かれているのは、*GSAW*のメイコムではジーン・ルイーズのそばにはない人やものである。ジェム、ディル、カルパーニア、自宅、かつて暮らした通りと近所の人々、カルパーニアが兄妹の世話をし、叱り、ものを教えてくれていたこと。記憶を通して無いものや人々を蘇らせようとするまなざしが*TKAM*を貫いている。*TKAM*で語り手は、大人の語り手の思考と抑制をもって子どもの頃の日々を描き、物語を1930年代に集中させている。

## TKAMとジェムの死

We could see an occasional flash of the old charisma, but it was only a small reminder of a most vivacious lady. I wonder if people will speak of us, Wayne, in the past tense before we die. (Flynt, 38)

ハーパー・リーが歴史家 Wayne Flynt に宛てた 2005 年 2 月 18 日付の手紙の後半に、生者について過去形で語れることをめぐる上の一節がある。フリントはリーの長姉 Alice、次姉 Louise、リーとの交友の記録と、この手紙を含め姉妹と交わした書簡を *Mockingbird Songs: My Friendship with Harper Lee* (2017) にまとめている。上の手紙でリーは、認知症の症状が進行中だった次姉について“Wayne, the Louise we loved is lost to us.” (37) と記し、かつての「きわめて快活なレディ」はもういないと認め、フリントと自分は生きているうちから「過去形で語られること」はあるだろうか、と述べている。リーのこの言葉は、過去形で語られるのは基本的に死者であることを示唆している。

では、TKAM 冒頭の数パラグラフにおいて、ジェムはどのように語られているだろうか。第一行目は、ジェムが十二歳のときに肘を骨折した過去の出来事を述べ、この怪我に他者が関わっていることを示唆する。“When he was nearly thirteen, my brother Jem got his arm badly broken at the elbow.” 二文目でも過去の出来事が語られ、怪我が治って左腕が少し短くなったが、本人にとって最も大事なことは、アメリカンフットボールがいつかできるかどうかだったと説明する。(骨折した時点でアメフト部に入っているが、本格的なアメリカンフットボールは未体験である) 左腕について“His left arm was somewhat shorter than his right” と過去形が使われているのも過去のエピソードの語り方として違和感がない。

第二パラグラフには、ジェムが骨折するにいたった出来事について「かつて」兄妹でときどき語りあい、その発端について議論したことが述べられている。二人の考えを並べているセンテンスにおいて、語り手の

考えに“maintain”が現在形で使われている一方、ジェムの発言には“Jem. . . said”と過去形が用いられている。過去の会話について語るとき、語り手が意見を現在形で述べながら、(存命の) 相手がかつて語った意見について過去形で表現する場合はあるだろう。しかし、“maintain”が現在形で書かれている同じ文に、ジェムと語り手の年齢差に関して“Jem, who was four years my senior”と過去形で表現されている。

ジェムの言動に加えてジェムの存在自体が過去形で語られていることによって、ジェムと語り手のあいだに物理的距離とは異なる距離が広がっていることが小説冒頭で示唆され、ジェムの死は暗示されているのではなかろうか。ジェムに関する描写には、過去を語るべく用いる過去形と、死者に使われる過去形の両方が混ざっていると思われる。ジェムの肘の大怪我から数年を経て兄妹でその件について語り合うようになったという記述が示すのは、意見を交わしていた時点でジェムが生きていたということであり、語り手が語っている時点でジェムが生きていることは意味しない。

When he was nearly thirteen, my brother Jem got his arm badly broken at the elbow. When it healed, and Jem's fears of never being able to play football were assuaged, he was seldom self-conscious about his injury. His left arm was somewhat shorter than his right; when he stood or walked, the back of his hand was at right angles to his body, his thumb parallel to his thigh. He couldn't have cared less, so long as he could pass and punt.

When enough years had gone by to enable us to look back on them, we sometimes discussed the events leading to his accident. I maintain that the Ewells started it all, but Jem, who was four years my senior, said it started long before that. He said it began the summer Dill came to us, when Dill first gave us the idea of making Boo Radley come out. (3, 下線筆者)

Carolyn Jones は“Atticus Finch and the Mad Dog”の後半で *TKAM* の第一

段落を取り上げ、トム・ロビンソンとジェムを比較している。左腕が使えないトムは刑務所から脱走を図ったが、警察に撃たれ、死ぬ。一方ジェムは腕に痕は残るが生きていく——“Jem is crippled and lives; but, the injury is the sign of the experience’s “leaving its mark” on Jem’s body and on his soul.”——とジョーンズは述べている。(Jones, 159) ここに *GSAW* の内容も重ねれば、二人の比較には、二十代の死という共通項が加わる。*GSAW* の内容からするとジェムは二十八歳で亡くなっていると考えられ(ジーン・スカウトは二十六歳で、兄の四歳下。兄は二年前に亡くなった)、*TKAM* 第19章の法廷場面でトムは二十五歳だと述べている。

*TKAM* には、語り手と兄のあいだの距離が広がってゆく様子が描かれている。ジェムが少年として成長してゆくとき、次第に広がるこの距離を Matthew J. Bolton は、だんだん広がる健全な隔たり “a growing and healthy separation” (Bolton, 74) と呼んでいる。たとえば第6章でジェムはラドリ一家から逃げ帰る際にフェンスにひっかかったまま残したズボンを一人で取りに行くと妹に宣言し、深夜に出かける。この場面で語り手(大人のジーン・ルイズ)はジェムの考え方が理解できなかったと述べ、それがジェムとのあいだに距離が生まれた最初だったのではないかと分析をする——“It was then, I suppose, that Jem and I first began to part company.” (63, 下線筆者) このように兄の成長に伴い、兄妹がともに考え、行動する時間が減ってゆくことに加えて、ジェムの死によって二人が決定的に離れることも、*TKAM* における兄の描き方にかかわっているのではないか。

*TKAM* にはアティカス・フィンチ家の家族史が *GSAW* よりも簡略に述べられ、兄妹の母親の死、母方の家系の心臓の弱さが述べられている。*TKAM* で省かれているのは、子供たちの名前の由来、母親が亡くなった場所、母親の名前、そしてジェムの死だ。子ども時代の数年間を描く *TKAM* に語り手や他の登場人物の現状は語られていない。一方、*TKAM* には、二歳で母と死別した語り手と違って、ジェムは母親を「はっきり覚えていた」とある。

Our mother died when I was two, so I never felt her absence. She was a Graham from Montgomery; Atticus met her when he was first elected to the state legislature. He was middle-aged then, she was fifteen years his junior. Jem was the product of their first year of marriage; four years later I was born, and two years later our mother died from a sudden heart attack. They said it ran in her family. I did not miss her, but I think Jem did. He remembered her clearly, and sometimes in the middle of a game he would sigh at length, then go off and play by himself behind the car-house. When he was like that, I knew better than to bother him. (6-7, 下線筆者)

第15章には、亡母とジェムの容姿をつなぐ描写があり、二人のつながりは、ジェムの早世の暗示にも見える。第15章は夜中に拘置所の前で、トム・ロビンソンを出せと言う男たちとアティカスが話している緊迫した場に、突然スカウトとジェムとディルの子ども三人組が現われる。アティカスはジェムにあとの二人を連れて帰れと命じるが、父を心配するジェムは拒む。父子が腰に手を当てて向き合い、相手の言葉を拒む姿勢が似ていると語り手は述べる前に、ジェムの髪と瞳の色、卵型の顔が母親似であることを特筆する。<sup>i</sup>

Jem's soft brown hair and eyes, his oval face and snug-fitting ears were our mother's, contrasting oddly with Atticus's greying black hair and square-cut features, but they were somehow alike. Mutual defiance made them alike. (173)

第一部の終わりの第11章も、口の悪い老婦人 Mrs. Dubose とジェムの衝突と交流を通して、ジェムを間接的に死と結びつけている。ジェムは、父の悪口を言われて憤り、デュボースさんの庭に入り込んで妹のバトンを振り回し、椿のつばみを打ち落とす。その晩、アティカスはジェムに一人で老婦人に会いにゆかせ、罪滅ぼしとしてひと月にわたって朗読に

通うことが決まると、アティカスはジェムが一人で通えばいいと言う。結局一週間延長された罪滅ぼしの朗読期間中、妹は兄についてゆき、病人の枕元にいる。朗読に通わされた真の理由をジェムが知るのは、老婦人が亡くなった夜である。彼女は鎮痛剤としてモルヒネを投与されて薬物依存症になっており、依存症を脱して死を迎えたいと望んでいた。ジェムの朗読は、モルヒネ依存を断ち切るために、気を紛らわせる手立てであった。この戦いに挑む彼女の思いと姿勢を、勇気のひとつの形としてジェムに見せたかったとアティカスはジェムに語る。

第11章末に描かれるのは、デュボースさんから贈られた、いわば死者からの贈り物である白椿を見つめるジェムの姿だ。花が入っていた箱を兄が捨て、花びらにそっと触れる様子をスカウトは就寝する前に見ている。“Jem picked up the candy box and threw it in the fire. He picked up the camellia, and when I went off to bed I saw him fingering the wide petals. Atticus was reading the paper.” (128) こうしてジェムとアティカスの姿を記して第一部は終わるが、アティカスがジェムに伝えた、勇気をめぐるこの教えを回想しているのはジーン・ルイーズだ。父が息子に伝えたことは、娘の観察と語りによって残る。兄と父の姿をとどめるのは妹／娘という構図は、作品全体の終わり方とも重なる。

第二部もジェムへの言及から始まり、一行目の“Jem was twelve.” (131) は、作品冒頭に述べられた骨折をする年齢だと知らせている。TKAMは、ジェムが怪我をしたハロウィーンの晩に至る経緯を、彼の言動に注目しながら伝えるジェム観察記という側面があり、弁護士になろうという将来の展望を含めてジェムの姿を残している。ジェムはよく読書をする、ものや人との向きあい方、そしてアティカスから教わる価値観が父と共通する。ジェムはブー・ラドリーの状況について考えるようになり、父の射撃の腕前に驚く。第10章では、父が射撃の腕前を誇らないことに触れて、“Atticus is a gentleman, just like me!” (113) と喜び、ロビンソン青年が有罪判決を受けた翌日、第22章では、“Soon’s I get grown--” (246) と、大人になったら改善したい制度について、つぶやいている。

## 静かなジェム

物語の終わりは、物語の最初へ円を描いて戻っていくように見えて、異質であるとも考えられる。GSAWにおけるジェムの死と重ねれば、TKAMはジェムを構成の中心に置いた追悼である。ジェムが語り手から遠い場所にいると解釈できる冒頭の二パラグラフ、そして一連の出来事のそもそもの始まりをめぐる兄妹の議論以降、死者ジェムは回想のなかで再構築され、隣人に命を救われる。TKAMで回想されているのは、亡兄が父を恨む男に命を狙われ、危険な目にあったが、死ななかったときの出来事と読むことが可能である。TKAMは、父と息子が翌朝顔を合わせることを予告して終わる。“He turned out the light and went into Jem’s room. He would be there all night, and he would be there when Jem waked up in the morning.” こうして兄の姿および兄と父の関わりを言葉に残すという、作品全体を象徴する描き方で終わる。

TKAMでは語り手が、父から息子へ伝えられた教えや言葉、二人の会話、兄妹の議論を伝えている。この回想にないものは、GSAWに描かれているジェムの死、アティカスの人種差別主義、父親に対するジーン・ルイズの幻滅である。TKAMに描かれているのは、ジェムの将来の夢、ジェムに対する父親の期待、語り手から徐々に離れてゆくジェムであり、回想の最後は未来へ開かれているように見える。

その一方で、TKAMの最終章でジェムは薬を投与され、ベッドに横たわっている。翌朝は目覚め、いずれは作品冒頭にあるように、アメリカンフットボールを楽しみ、数年を経て、この大骨折に至る一連の出来事の発端について妹と語り、分析し、意見を戦わせることになるのだが、最終章では意識がない、静かなジェムである。この作品をジェムの死後になされた回想と見なせば、語り手が回想している時点では「もう共に過ごせぬ父子」という現実があると考えられる。翌朝目覚めるジェムの未来へ希望を添えて終わりつつ、付き添ってもジェムが二度と目を覚ますことはなかった夜のことも重ねられているからこそ、TKAM最終章におけるジェムは静かで、眠ったままなのかもしれない。

## 注

- i 一方、語り手は父親似であると Uncle Jack が第9章で述べている。  
‘You’re more like Atticus than your mother,’ he said. (90)

## 引用文献

- Bolton, Matthew. “To Kill a Mockingbird as an introduction to Faulkner.”  
*Critical Insights, To Kill a Mockingbird*, edited by Don Noble, Salem Press, 2010. pp.67–81.
- Cep, Casey, *Furious Hours: Murder, Fraud, and the Last Trial of Harper Lee*. 2019. Vintage Books, 2020.
- Flynt, Wayne. *Mockingbird Songs: My Friendship with Harper Lee*. Heineman, 2017. Arrow books, 2018.
- Jones, Carolyn. “Atticus Finch and the Mad Dog: Harper Lee’s *To Kill a Mockingbird*.” *Critical Insights, To Kill a Mockingbird*, edited by Don Noble, Salem Press, 2010. pp.145–164.
- Lee, Harper. *Go Set a Watchman*. Harper Perennial, 2015.
- , *To Kill a Mockingbird*. 1960. Harper Perennial Modern Classics, 2002.
- Murphy, Mary M. *Atticus, Scout, and Boo*. 2010. Harper Perennial, 2011.
- Reutter, Cheli and Jonathan S. Cullick. *Mockingbird Grows Up: Re-Reading Harper Lee since Watchman*. U of Texas Press, 2020.